

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

# 国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題

著者	鈴木 一代
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	4
ページ	15-24
発行年	2004-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000970/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000970/</a>



# 国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題

Issues in research on cultural identity formation in intercultural children

鈴木 一代

SUZUKI, Kazuyo

The purpose of this paper is to discuss the issues in research on cultural identity formation in intercultural children with Japanese ancestry. Namely, the “diversity of intercultural children”, “the problems of the research methods” “research points”, and “research ethics” will be addressed. Because of the diversity of intercultural children, qualitative research (especially, case studies), fieldwork, long-term/longitudinal research, analysis of secondary data, interdisciplinary research/research attitudes and research by the intercultural child himself/herself are considered as the useful research methods. Then, analysis of the cultural identity formation process in intercultural children by case study method, concrete education/support for cultural identity formation, social utilization of research results are mentioned as research points. Finally, research ethics, such as the obligation to maintain personal privacy are discussed. The research on cultural identity formation in intercultural children with Japanese ancestry has just begun. The results of this research are expected in the future.

## はじめに

本稿における「国際児 (intercultural children)」は、「国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子ども」を指す<sup>1) 2)</sup>。たとえば、日本人女性とアメリカ人男性、日本人男性とフィリピン人女性、韓国人男性とドイツ人女性の間生まれた子どもである。

近年、日系国際児 (両親のどちらか一方が日本人、他方が外国人の子ども) の増加が著しい。人口動態統計によると、日本国内の総出生数に占める日系国際児の割合は、調査が開始された1987年以来、上昇傾向にある。

2003年の日系国際児の出生数は、21,522人であり、総出生数の1.92% (52人に1人) を占めている<sup>3)</sup>。地域の保育園、幼稚園、公立学校に通学する国際児も増えている。特に、幼児教育の分野では、国際児や外国籍の子どもの増加とともに、多文化保育も少しずつ浸透してきている (李、2003)。

国際児は、二つ以上の文化・言語が存在する家庭環境や、家庭内と周囲 (家庭外) とでは文化・言語が異なる状況で育つことも多い。また、成長過程で、親の都合によって、二つ以上の国 (両親の出身国など) に居住したり、あるいは、二つ以上の国の間を複数回移動す

---

キーワード：文化的アイデンティティ形成、日系国際児、研究課題

Key words : cultural identity formation, intercultural children (with Japanese ancestry), research issues

ることも少なくない。このような多文化環境のなかで生育する国際児にとって、言語習得、文化習得、文化的アイデンティティ形成などは重要な課題であるが、日系国際児の増加が、最近の社会現象であるため、それらについての研究の蓄積は十分ではない。そのなかで、比較的関心がもたれているのは言語習得である。主に、二言語習得過程（山本、1991、など）、家族成員間の言語使用（山本、1985、など）、英語習得（鎌田、1999など）が取り上げられているが、対象者のほとんどは親の母語が日本語と英語の日系国際児である。親が英語圏出身者と日本人以外の組み合わせである日系国際児の言語習得を扱った研究としては、日系インドネシア人の日本語習得について言及した鈴木（1996）などがあるにすぎない。言語習得以外の研究としては、日本在住の日米国際児の実態を明らかにした新田（1992）、アメリカ人<sup>4)</sup>の教育権や言語教育などを問題にしている野入（2000）やマーフィー・重松（2002）、日系国際児の学習環境などを把握しようとした高橋（2002）、カナダ在住の日系国際児の日本文化継承を扱った嘉納（2003）などがあげられる。しかしながら、日系国際児の文化的アイデンティティやアイデンティティを中心的なテーマとして取り上げた研究は極めて少ない（鈴木、2004；Murphy-Shigematsu, S., 1997など）。

文化的アイデンティティは、「自分がある文化に所属しているという感覚・意識」、「文化的帰属感」である。多文化環境で成長する国際児にとって、文化的アイデンティティ形成は、中核的な課題（問題）であり、「自分についての総合的・統合的な意識」であるアイデンティティの形成と深くかかわっていると考えられる。筆者は、インドネシア在住の日

系国際児の文化的アイデンティティ形成とそれに影響を及ぼす要因を明らかにする目的で、1991年以来、フィールド調査を継続している<sup>5)</sup>。その調査の中間的な結果は、日系国際児の文化的アイデンティティ形成には、居住地（国）（現在の居住地の環境、居住地の選択、住み心地のよさ、など）、日本人の親の性別（どちらの親が日本人か）、両親の文化（国）の組み合わせ（それぞれの文化・社会のなかでの国際児の位置付けに關与）、国際児の外見的特徴（例：居住地の人たちとの外見的類似度）、家庭環境（親の属性、夫婦関係、きょうだい、言語使用、経済状態、将来計画、などだが、なかでも経済状態の影響は大きい）、学校環境（どの学校を選択するか、日本語補習授業校に行かせるか）などの要因が影響を及ぼすことを示唆している（鈴木、2004）。また、国際児が二文化の混合のアイデンティティである「国際児としてのアイデンティティ」を構築する条件として、二つの言語と文化の習得、および、居住地が国際児を肯定的にとらえる社会であること、さらに、国際児は複数文化を常に意識しながら、自分自身の文化的アイデンティティを一生模索していくことを指摘している。

すでに述べたように、日系国際児の文化的アイデンティティ形成については、十分な研究がなされているわけではないので、不明確な点も多い。日系国際児が、ますます増加していくことが予想される現在、国際児の文化的アイデンティティ形成について明らかにしていくことは、極めて重要であろう<sup>6)</sup>。本稿では、筆者の研究結果（上述）を踏まえた上で、日系国際児の文化的アイデンティティ形成についての研究の問題点を整理し、検討することを目的とする。

## 1. 日系国際児の多様性

日系国際児の文化的アイデンティティ形成に関する研究において、まず考慮しなければならないのは、日系国際児の多様性である。Table 1は、日系国際児の多様性を生み出す主な条件を整理したものである。

A群は、国際児が生まれたときに決まっており、自分自身では、選択できない事柄である。特に、からは、両親とも日本人の子どもの場合には、問題にならない、国際児特有のものである。B群は、生後、成長とともに変化し、成人すれば、国際児自身で選択可能な事柄でもある。C群は、その他の一般的な条件であり、年齢や性別などである。

A群の は、同じ日系国際児であっても、日本人ではない(外国籍の)親の出身国によって異なる、日本あるいは、ある社会(例：外国籍の親の出身国)における国際児のイメージや位置付けを決める。国の経済力、言語の優位性、両国の関係性などと関与している。たとえば、日系国際児が日本に居住しており、日本よりも外国籍の親のX国がより肯定的に評価される場合には、一般的に、その国際児は肯定的なイメージで見られ、反対に、日本と比較してX国が低く評価される場合には、否定的にみられることが多い。さらに、一国内における親の出身地域が問題になることもある。 は、父親が日本人で母親が外国籍なのか、母親が日本人で父親が外国籍なのかということであり、法律上の問題(例：国籍)などにも関係する。たとえば、インドネシアは父系制なので、父親がインドネシア人の場合は、国際児もインドネシア人としての権利等をもつが、母親がインドネシア人の場合は、外国籍の父親に従うので、外国人として扱

Table 1 日系国際児の多様性を生み出す主な条件

<p>A：生まれながらに規定される条件(自己選択が不可能なもの)</p> <p>親の国籍の組み合わせ</p> <p>日本人の親が父親か母親か</p> <p>国際児の外見(生物学的なもの)</p> <p>国際児の出生地</p>
<p>B：生後規定される条件(成長とともに自己選択可能なもの)</p> <p>国際児の居住地</p> <p>家庭環境</p> <p>学校環境 (仕事)</p>
<p>C：その他(年齢、性別など)</p>

れる。 は、遺伝によって規定される、国際児の外見的特徴(目や膚の色、体型など)で、どちらの国の標準的な身体的特徴を多くもっているかということであり、居住地の人たちとの類似度も問題になる(「目立つ」か「目立たない」か)。国際児によっては、成長とともに変化する場合もある。 の出生地は、母の国か、父の国か、それ以外の国かである。出生地は、程度の差はあっても、国際児の「こだわり」として生涯にわたって意味をもつ(鈴木・片寄、1997)。

B群の は、現在の居住地(あるいは、将来の定住地の選択)がどこかということである(母の国、父の国、そのほかの国)。国際児は、居住地の社会・経済システムや文化などに影響を受け成長する。には、親の個人特性(教育程度など)、家族構成、言語使用、宗教など多くの事柄が含まれるが、そのなかでも、夫婦関係と経済状態が国際児に与える影響は大きい。この家庭環境は、学校環境(学校選択を含む)を規定し、国際児の将来の

職業（仕事）選択にも関与するが、成長とともに、国際児自身が選択できる可能性が大きくなる。

厳密には、日系国際児であっても、から のひとつでも異なる国際児は、(文化的)アイデンティティ形成について異なった条件をもつと考えられる。また、B群 ~ の変化は、国際児の(文化的)アイデンティティや言語習得に新しい可能性(あるいは、危機)をもたらず。さらに、C群が加わることによって、いっそう複雑になる。国際児は非常に多様である。そして、この多様性が、国際児の研究を困難にしている。各条件の違いを踏まえ、国際児の多様性を認識した上で、研究をおこなう必要がある。次に、国際児の多様性の具体例を二つ示す。

[ 具体例 1 ]

「出生地」と「居住地」（移動と定住）による国際児の多様性

- タイプ : 日本生れ、日本育ち
- タイプ : 日本生れ 外国 日本(繰り返し)
- タイプ : 日本生れ 外国育ち
- タイプ : 外国生れ、外国育ち
- タイプ : 外国生れ 日本 外国(繰り返し)
- タイプ : 外国生れ 日本育ち

と は、生れたところに一生定住するタイプである。と は、日本生れか、外国生れか(出生地)は異なるが、その後、日本と外国との間の移動を繰り返すタイプである。IIIとVIIについては、出生地は異なるが、一度だけ移動し、出生地とは異なる国に定住するタイプである。ここでの外国は、外国籍の親の出身国である場合が多いが、それ以外の国の可能性もある。

[ 具体例 2 ]

「家庭環境」（国際児と主な養育者）による多様性

- タイプ : 両親と国際児
- タイプ : 母親と国際児(父親と国際児)
- タイプ : 祖父母と国際児
- タイプ : 養母・実父(実母・養父)と国際児
- タイプ : 養父母と国際児(養子)
- タイプ : 孤児(国際児)

は、両親と子どもがいっしょに生活している家庭である。は、両親の離婚、一方の親の死亡、未婚の母などの理由で、親一人と国際児が生活するタイプ、は、両親の死亡、あるいは、なんらかの理由で両親とは暮らすことができないので、祖父母、あるいは、祖父母のどちらかといっしょにいる場合、は、離婚後、あるいは死別後、再婚した親とその配偶者とともに国際児が暮らす場合、は、国際養子縁組のケース、そして、は、施設等で生育する場合である。

2. 研究方法の問題

国際児が、多様であるために、研究方法にも工夫が必要である。上述のAからCまでの条件がある程度同じ国際児を数多く集めることは容易なことではないし、定量的な研究が国際児の文化的アイデンティティ形成の解明に適切かどうかも明確でない。次に、国際児の文化的アイデンティティ形成を研究する際に、有用であると思われる研究方法について考察する。

(1) 事例研究などの質的研究

ひとりひとりの国際児が微妙に異なる条件をもつことが予想されるので、量的な研究方

法よりも、質的な研究方法に研究成果を期待できる。たとえば、個人面接（法）などにより、個々の対象を詳細に記述・分析していく事例研究などが有効であるように思われる。研究目的によっては、量的な研究方法も適宜使用することは可能だろう（例：鈴木、2003）。

## （２）フィールドワーク（現場）的研究

国際児の文化的アイデンティティ形成を問題にする場合には、国際児を取り巻く総合的な環境（経済、法律、文化・社会的環境、歴史的視点など）との関連で国際児を理解することが必要不可欠である。そのためには、国際児が生活している家庭、学校、地域社会等の現場（フィールド）に研究者自身が入り込み、国際児やその周囲の人々との関係を深めながら、研究を進めていくことが望ましい。

## （３）長期的・縦断的（継時的）研究

個々の国際児を、ある一時点（あるいは、短期間）においてのみ問題にするのではなく、国際児をとりまく総合的な環境の変化も視野に入れながら、長期的に追跡するような研究によって、国際児の文化的アイデンティティ形成のプロセスや要因を明確にすることが可能になるだろう。また、生涯発達の視点を取り入れることも大切だろう。

## （４）二次的資料の分析による研究

実証的な研究以外にも、国際児についての記録（例：生育記録）・伝記や国際児自身による自伝・日記等を用いることも可能だろう<sup>7)</sup>。特に、自伝の分析は、国際児の内面を理解したり、(文化的)アイデンティティを明らかにするために有用であると考えられるが、執筆した時点での国際児の回想であることを考慮

した上で、有効に使用する必要がある。

## （５）学際的な研究・研究姿勢

国際児の文化的アイデンティティ形成の解明には、心理学、教育学、文化人類学、社会学、法学、政治学、神経生理学、遺伝学、などの学問分野からの取り組みが期待できるし、綿密な計画に基づく学際的な協同研究も有効であろう。また、研究者が、各自の専門分野についてだけではなく、学際的な興味と知識を備えていることが、国際児の文化的アイデンティティ形成のような複雑な研究には不可欠であるように思われる。たとえば、心理学者であっても、法律や政治・経済、教育制度、あるいは、生理学等に造詣が深ければ、ある事象について、多面的・総合的な分析や解釈が可能になる。

## （６）国際児自身による研究

イーミック（emic）的アプローチとイーティック（etic）的アプローチがあるが、前者は、ある特定社会の内部から行動を研究するのに対して（当事者の視点）、後者は、外部からある特定の行動を明らかにしようとする（Segall, A. H. 1990）。日系国際児数の増加が新しい社会現象であるために、国際児自身による、国際児の文化的アイデンティティについての研究は極めて少ないが（例：Murphy-Shigematsu, S., 1997）、今後、国際児のなかから研究者が育つことによって、新たな研究成果が期待できるだろう。

以上、国際児の文化的アイデンティティ形成に関する研究に有効と思われる研究方法について言及したが、研究対象や目的によって、研究方法を選択したり、複数の研究方法を適

宜組み合わせることによって、稔りある研究成果が得られると考える。

筆者は、上記（1）から（5）を含む「文化人類学的臨床（発達）心理学的アプローチ」（鈴木・藤原、1992；Suzuki, K., 2000）を国際児の文化的アイデンティティ形成に関する研究に使用している。これは、長期的・縦断的フィールドワーク、ラポールと支援・援助、非構造的・半構造的面接、参与観察、マクロ・ミクロ的視点、文化・社会・歴史的視点というキーワードによって説明されるようなアプローチである。すなわち、国際児をとりまく文化・社会環境（社会・経済・制度、教育、など）に配慮し、時間の流れのなかで、対象者との相互的信頼関係を築き、それを大切にしながら、必要ならば援助の手を差しのべるなかで、資料を収集するというアプローチである。フィールドノート等に基づき、時間の経過（時系列）による詳細な個別カードを作成し、変化に着目し、質的な分析をおこなう。回想法による資料の収集ではなく、研究者がリアルタイムで対象者の考え方や変化（あるいは、環境とその変化）を捉えることができる。

### 3. 研究課題

ここでは、現時点における、国際児の文化的アイデンティティ形成に関する研究課題について取りあげる。

#### （1）事例研究による、国際児の文化的アイデンティティ形成過程とその際に生じる問題の解明

多様な日系国際児が存在するために、国際児として一括して論じられないことについてはすでに言及した。研究蓄積の少ない現状で

は、それぞれの国際児について、個別に詳細な資料を収集し、事例的に検討していくこと、すなわち、事例研究が最も有効な研究手段であるように思われる。事例研究の結果を集合し、国際児間の丁寧な比較検討作業によって、共通点と相違点を明確化していくことが必要であろう。このような作業の繰返しによる知見の蓄積によって、日系国際児の文化的アイデンティティ形成には、一般的な（共通の）プロセスがあるのか、もしあるとしたら、それはどのようなプロセスなのか、それに影響を及ぼす要因は何か、また、どのような問題が生じやすいのか、などを明らかにすることができる<sup>8)</sup>。

#### （2）国際児の文化的アイデンティティ形成への具体的な教育・支援を提示するための研究

多文化環境のなかで成長する国際児が幸せに成長するためには、文化的アイデンティティを育む教育や支援が重要である。日系国際児の文化的アイデンティティ形成への教育・支援について論じる場合には、子ども（国際児）に対する教育・支援だけではなく、親（外国人の母親・父親、日本人の母親・父親）に対する支援、学校の教師への支援、地域社会への支援などが問題になる。それぞれがどのような支援を必要としているのか、また、それぞれの対象への支援がどのように国際児の文化的アイデンティティをはぐくむ教育・支援につながっていくのか、などを明らかにするための研究が必要である。それらの研究成果によって、具体的な支援モデルを提示することが可能になる。たとえば、国際児の親に対する支援を問題にする際に、外国人の親の方が日本人の親よりも多くの支援が必要であ

ることは容易に推察できるが、具体的にどのような支援が必要なのか、外国人の親が父親か母親かによって必要な支援は異なるのだろうか、日本人の親は支援を必要としていないのだろうか、というような点を明らかにした上で、実際の支援をどのように行っていったらいいかを検討しなければならないだろう。

### (3) 巨視的な研究と研究成果の社会への還元

国際児の文化的アイデンティティ形成を問題にするときには、それぞれの国際児についての事例的研究や個人レベルの支援（ミクロの支援）は十分に意味のあることだが、社会全体の変化を促すような研究や働きかけ（マクロの支援）も重要である。たとえば、国際児としてのアイデンティティの構築には、二つの文化・言語の習得と並び、居住地（国）が国際児を受入れる必要性が指摘されている。このような指摘は、これからの多文化時代における、日本人と日系国際児との関係を考えるきっかけを社会に提供し、国際児の受入れ体制（社会システム、教育システムなど）の整備を促す可能性をもたらす。また、法律の変更（例：国籍法）、教育制度の改善（例：入試制度）などを視野に入れた研究は、実際に、それらの変更や改善につながるかもしれない。すなわち、社会に対してなんらかの働きかけが可能であるような研究をおこない、その研究成果を実際に社会へ還元していくことが望まれる。

## 4. 研究倫理

国際児の文化的アイデンティティ形成を明確にするためには、個人に焦点をあてた事例研究が有効であることについて言及したが、

このような事例研究をおこなう際に、最も注意を払わなければならないのは、研究倫理の問題である。研究倫理については、アメリカ心理学会（1992）の倫理綱領や日本発達心理学会（2000）が監修したガイドブックなどがあるが、ここでは、国際児を対象とした研究において、特に考慮すべき事柄について取り扱う。

### (1) 守秘義務

守秘義務は、国際児を対象とする研究に関する倫理のなかでも、極めて重要である。心理学等の研究分野では、研究調査上入手した調査対象者（協力者）の個人的な情報については守秘義務があるが、義務としてだけではなく、常に個人を尊重し、迷惑がかからないようにする研究姿勢が望まれる。実際の調査の際には、調査対象者に対して、研究者には守秘義務があることを説明することによって、個人の情報が他者には伝わらないことを理解してもらうことが必要である。そうでない場合は、調査に協力してもらえなかったり、たとえ協力してもらえたとしても、正しい回答が得られなかったり、せっきくの調査内容が信頼のおけないものになる可能性もある。

### (2) 個人が特定されないような工夫、あるいは、個人の了解を得る必要性

研究成果の発表の際に必ず配慮しなければならないことは、「個人が特定されないこと」である<sup>9)</sup>。この点が明確でない場合は、原則として発表すべきではない。特に、不特定多数の人の目にふれる出版物の場合には、細心の注意が必要である。仮名はもとより、研究の本質にかかわりのない情報については一部変更して提示することが通常おこなわれている



る。しかし、日系国際児同士はなんらかのネットワーク（地域、学校、私的なクラブ等）で繋がっていることも多く、仮名を用いたり、個人情報の一部を変更して提示しても、特定のネットワーク内では、その国際児が特定される可能性が高い場合も少なくない。そのような場合には、研究成果を発表することや、発表予定の内容について国際児自身（未成年の場合には、親）から了解を得られることが望ましい（例：同意書）。しかしながら、長期にわたる継続的な調査のなかでの中間的な発表の際には、調査対象者に発表内容を提示したことが、次の調査に思わぬ影響を及ぼすこともあるので、状況によって、どのような方法で了解を得るべきかを十分に考慮しなければならぬだろう。

### （3）研究結果が、ある国（あるいは、集団）の批判や不利益になるような場合

研究の進行とともに、その研究結果（あるいは、その一部）が、国際児の居住する国や国際児が所属する集団の批判や不利益につながる事が明らかになることがある。そのような結果の発表の際には、研究者、あるいは、人間としての根本的な姿勢が問われることになるが、それぞれの状況によって（発表後、起こりうる事態についても考慮しながら）、発表すべきかどうか、慎重に吟味する必要がある。継続調査の場合には、成果を発表したことによって、研究の継続が不可能になることもありえる。

### おわりに

本稿では、日系国際児の文化的アイデンティティ形成についての研究の問題点を、「日系国際児の多様性」「研究方法の問題」「研

究課題」、そして、「研究倫理」に整理し、検討した。

日本における、日系国際児の文化的アイデンティティやアイデンティティ形成に関する研究はまだ始まったばかりである。日系国際児は、今後さらに増加することが推定される。国際児が、二つの文化（異質なものを）を統合し、文化的アイデンティティやアイデンティティを構築していく過程についての研究は、私たちが、二つの異なった事項を自分のなかで統合していかなければならないときに、大きな示唆を与えてくれるように思われる。その意味でも、日系国際児の（文化的）アイデンティティ形成についての研究成果が早急に蓄積されていくことが望まれる。

### <注>

- 1) 「国籍」は、オリジナルな国籍（出生時の国籍）をさす。また、本稿では、祖先（例：祖父母）のひとりが外国籍である子どもや国際児どうしの間に生まれた子どもは含めないことにする。
- 2) 「国際児」の定義については、「国際児」を「国籍、人種、民族などのいずれか、あるいは、複数異なる男女の間に生まれた子ども」として、広義にとらえる立場もある（鈴木、2004参照）。また、「国際児」のなかに、外国人の子どもや海外帰国生を含める場合もある（例：石河、2003）。
- 3) 海外における日系国際児数の増加も報告されている（鈴木、2004）。
- 4) アメラジアン（Amerasian）とは、アメリカ人とアジア人の間に生まれた国際児をさす言葉である。
- 5) 毎年2～3回、各回2～8週間、デンパサールを中心とする、最も都市化した地域でフィールドワークを実施している。主な対象は、日系国際児とその親（約30家族で、ほとんどの子どもは、日本語補習授業校に在籍しているか、在籍した経験がある）である。調査当初、国際児のほとんどは、乳

## 国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題

幼児だったが、現在、これらの国際児の大部分は、思春期・青年期に達している。継続的な調査のため、諸事情により対象者には多少変動がある。フィールドノートの作成のほか、面接調査や質問紙調査も実施している。研究の詳細については、鈴木（1996、1997、1998、1999、2001、2004）、鈴木・藤原（1993）、鈴木・片寄（1997）等参照。

- 6) 国際児の文化的アイデンティティ形成を考察する際には、言語との関連についても言及すべきだが、広範な議論になるので、本稿では、言語については最少限度にとどめる。
- 7) たとえば、西平（1996）は、伝記資料を用いて、人格形成の過程や条件を研究しており、生育史心理学と名付けている。
- 8) アイデンティティは、エリクソン、E.H.（1950）によって、広く普及した概念である。その後、アイデンティティのとらえ方は、時代や立場によって異なっている。それにもかかわらず、アイデンティティについては、さまざまな視点から多数の研究成果が内外で発表されて続けている。国際児の文化的アイデンティティ形成の研究は、アイデンティティをめぐる理論に新たな発展をもたらすことが期待できると考えるが、この点に関しては、稿を改めて論じたい。
- 9) 調査対象者のなかには、例外的に、実名で発表されてもかまわないという人もいる。そのような場合であっても、発表後、不快感を示す人もいる。また、場合によっては、訴えられる可能性がないわけではない。実名（あるいは、個人が特定されるような形）での発表には十分な注意が必要である。

### <引用文献>

- アメリカ心理学会/富田正利・深澤道子訳（1992）サイコロジストのための倫理綱領および行動規範 日本心理学会
- エリクソン、E. H.（1950） 幼児期と社会 ・ 東京：みすず書房
- 石河久美子（2003）異文化間ソーシャルワーク：多文化共生社会をめざす新しい社会福祉実践 東京：川

島書店

- 鎌田ローレル・ダイアン（1999）話はじめる前の読字学習 - 最初の200語 山本雅代編著 バイリンガルの世界 東京：大修館書店 pp.100 132
- 嘉納もも（2003）多文化家庭におけるエスニック文化の継承：カナダ・トロント市の5つのケースから 多文化・多言語研究、第9巻、85-105 厚生労働省統計局 人口動態統計
- Murphy-Shigematsu, S.（1997）“American-Japanese ethnic identities: Individual assertions and social reflections. Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism, vol. 3, No. 1, 23-37.
- マーフィー重松 スティーヴン（坂井純子訳）（2002）アメリジアンの子供たち：知られざるマイノリティの問題（集英社新書）東京：集英社
- 日本発達心理学会（2000）心理学・倫理ガイドブック：リサーチと臨床 東京：有斐閣
- 西平直喜（1996）生育史心理学序説 東京：金子書房
- 新田文輝（1992）国際結婚のこどもたち 東京：明石書店
- 野入直美（2000）沖縄のアメリジアン 山本雅代編著 日本のバイリンガル教育、pp.213 252 東京：明石書店
- 李 節子（2003）国際結婚と多民族化する日本人 チャイルドヘルス6（1）, 45-48 .
- Segall, M.H. et al.（1990）Human Behavior im Global Perspective: An introduction to cross-cultural psychology. Boston: Allyn & Bacon. [田中國夫・谷川賀苗訳（1995）比較文化心理学 上巻 京都：北大路書房]
- 鈴木一代（1996）日本 - インドネシア国際児の日本語習得と言語・文化的環境についての一考察 東和大学紀要第22号、127-139
- 鈴木一代（1997）日系インドネシア人の文化・言語習得 - 居住地決定との関連性について 東和大学紀要第23号、115 - 130
- 鈴木一代（1998）国際児の学校選択と言語習得 - 日本 インドネシア国際家族、ドイツ語圏 インドネシア国際家族、英語圏 インドネシア国際家族の比較 東和大学紀要第24号、209 - 222
- 鈴木一代（1999）国際児の文化的アイデンティティ：

- 多文化環境のなかでの発達 東和大学紀要第25号、  
205 - 213
- 鈴木一代（2001）日本 インドネシア国際児の言語・  
文化習得についての一考察 埼玉学園大学紀要創  
刊号、1-11
- Suzuki, K. (2002) A study using "Cultural Anthropological  
- Clinical Psychological approach": Cultural iden-  
tity formation in Japanese-Indonesian children.  
BULLETIN of Saitama Gakuen University (Faculty  
of Humanities), Vol.2, 1-9
- 鈴木一代（2003）国際児の言語と文化：補習授業校講  
師の視点から 異文化間教育学会第24回大会発表  
抄録、82-83
- 鈴木一代（2004）「国際児」の文化的アイデンティティ  
形成：インドネシアの日系国際児の事例を中心に  
異文化間教育19、42-53、アカデミア出版会
- 鈴木一代・藤原喜悦（1992）国際家族の異文化適応・  
文化的アイデンティティに関する研究方法につ  
いての一考察 東和大学紀要第18号、99-112
- 鈴木一代・藤原喜悦（1993）国際児の文化的アイデン  
ティティ形成についての事例的研究 東和大学紀  
要第19号、123-136
- 鈴木一代・片寄美恵子（1997）国際家族の生活・適応  
状態と子どもの精神発達に関する研究：インドネシ  
ア-日本国際家族の場合について 研究助成論文集  
通巻第33号（安田生命社会事業団）、151 - 159
- 高橋順子（2002）多文化社会における「国際児」の研  
究 聖徳大学大学院児童学研究科修士論文
- 山本雅代（1985）日本のバイリンガル達 アンケート  
調査による英語 日本語バイリンガルの言語環境  
考察 パン、F. C.、秋山高二、浜田盛男編 『社会  
の中の言語 - 記号・人間・環境の相互作用』、pp.161  
184 広島：文化評論出版
- 山本雅代（1991）バイリンガル - その実像と問題点  
東京：大修館書店

### < 補足 >

本稿の一部は、2004年5月30日の異文化間教育学  
会第25回大会（同志社大学）における、ケース・パネ  
ル1「国際児の文化的アイデンティティ形成とその支  
援」のなかで発表された。